

■北洋さけ・ます漁業監督官 乗船記

「北洋余話」

奈良和俊

今年幸いにも、サケマス母船仁洋丸に監督官として乗船する機会を得られたので、2ヶ月間の洋上生活をふりかえり思い出すまま書きつづります。

函館を出港して5日目、最大速力12ノットの母船は漁場に到着した。北洋はどんよりとした濃い霧と冷たい風で我々を迎えた。早朝、無気味な海の彼方より、母船めがけて集まってくる独航船は、河川に遡上した黒ずんだ頑強な姿とは似ても似つかぬ2kg足らずの華麗な姿の銀鱗を次々と水揚げする。

今年よりソ連との民間協定で、公海上での操業中はソ連からオブザーバーを乗船させる事になり、漁場に着くや否や、ソ連監視船がやってきて2名のオブザーバーを乗船させた。彼らは22才のイリアと



写真1 ソ連オブザーバー
左イリア氏・右セレゲイ氏

27才のセレゲイで、ともにカムチャッカのペテロパブロスクに住む漁業監督官であった。ソ連の若者の間で今流行とみえ2人とも口ひげをはやした陽気な好青年であった。

イリアは学校を卒業したばかりで、大学では日本語を専攻し、話すのは勿論のこと漢字も1,000字は判るという優秀なる人物で、私の知らない旧態の字まで知っており、反対に漢字のクイズを出され、答えられず惨めな目に会った。私が露語会話の本を見ながら片言話しかけると「こんな本を見ていて

は覚えられません」と言って彼自身が書き込んで真黒になった単語カードを見せてくれました。彼が日本語を話せるのをいいことに、いろいろとソ連について日本語で話しかけると「ロシア語で話さない！あなた自身のためです」と言われ、もう何も言えなくなってしまった。

彼らの仕事ぶりは極めて真面目で、毎日我々とともに独航船からの水揚時の計量に立ち合い、計量中、空モッコだけを計り、秤の誤差をチェックすることもしばしばあった。

夕食後、彼らとドミノというゲームをよくやりました。これは2人ずつ組んで4人でやる数字のカード遊びで相手の手のうちを読むなかなか楽しいゲームです。最初はいくらやっても彼らが圧勝しました。どうも我々には解せぬロシア語でサインを送っているらしく、我々も負けずに、日本語でサインを送るとイリアにばれてしまうので、中国語（麻雀語）で例えば0と1のカードが必要な時は何げなく「パイパン、イーピン」という具合にサインを送り、最後は互角の勝負ができました。日本人はずる賢しこさでは負けません。

母船が米国200海里内での操業に移ると、彼らは下船し、今度は米国より2名のオブザーバーが乗船してきました。その1人は政府機関NOAA(National Oceanic and Atmospheric Administration)より派遣されたシアトルに住むトレシーで、イルカの研究者でした。彼はサケ流し刺網にかかったイルカの鰭の形や斑紋等を写真で撮った後、朝から夕方までかかり、毎日5～7頭を解剖し、各組織を冷凍標本として取り出していた。私の仕事は午後から手がすくので、イルカの解剖を手伝い、組織の名やイルカについて教えてもらいました。しかし、言葉の発音とは難しいもので同じ単語を言っているのに首をかしげられるのでまいりました。

北洋でみられたイルカはシャチの様に白と黒のツートンカラーのイシイルカで、6月～7月が出産期とみえ、♀の体内には出産間近の7～8kgの胎児がよく入っていました。面白い事に、イルカの胎児にはひげがはえていますが、親には1本もはえていません。

もう1人は、アメリカ政府よりサケ・マス漁獲調査員として、この期間のみバイトで雇われた22才のテキサスに住む大学生のラッドである。フルネームはアラン・ラッドと言い、懐しの名画「シェーン」の主人公と同名ではないかと皆が驚いて聞き返えすと、ラッドの頭文字がRとLとで異なり発音も違うと言うが、我々には全く同じに聞こえる。さすがにテキサス生まれだけ

あり、カーボーイハットをかぶり、テキサスでは蛇を銃で撃ち殺して焼いて食べるのが好物という血気盛んなテキサス野郎である。皆で彼に麻雀を教えある程度できる様になったので後ろについて「それを切つてはいけない」とかゴチャゴチャ言うと、急に立ち上がって「You play!」と怒鳴る。自分の考えでやるというすごく意地のある人物である。アメリカのオブザーバーとは1ヶ月の間いっしょに生活したので別れる時はほんとうになごり惜しかった。

我々の主な仕事は、独航船からの水揚量のチェックを船の表とどもの2ヶ所に分かれて行い、その合い間をみながら毎日シロ30尾、カラフト30尾、ベニ60尾、ギン30尾、スケ30尾の計180尾を目標に魚体測定や生殖巣重量等の生物調査を行う。サケがびっしり詰まったモッコが行きかう中を合羽を着て魚カゴを引っぱって歩くのは我々にとり、1日のうちで唯一の肉体労働である。楽しみなのは魚の胃内容物を

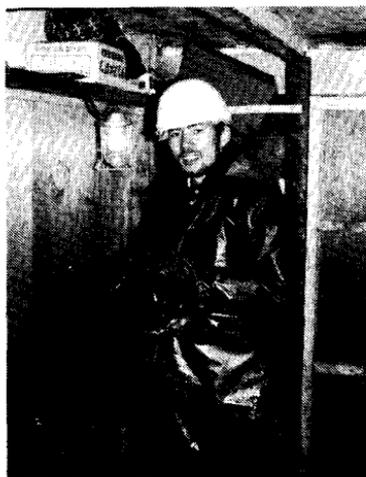


写真2 卵巣計量中の筆者

みる事で、魚種により違いがみられ、ベニはアミ類が多く、どう猛なギンは小魚や子イカが多かった。又、日々には餌となっている小魚や子イカがサケに追われながらも大きくなっていく過程がわかり面白い。

私にとっては、慣れぬ洋上生活である

が、海の男達は皆親切にしてくれ、毎日、温泉（海水風呂）は沸いているし食事豪勢で、船内での生活はたいへん快適であった。食事は3度行なわれるが、私の場合永年続いた朝食抜きの習慣のため、朝食をとると1日中体の調子が悪いので、健康のため1日2食とした。食事の場所はサロンと呼ばれる部屋で、船長、船団長、機関長、通信長、オブザーバー……と船の幹部の人達といっしょに行われる。幼少の頃から「食事中はしゃべるな」と教えこまれ、食物をみたら我先にガツガツと黙って食い入る方なものだから、会話をしながらたっぷり1時間かけて食事をするのは最初たいへんな苦痛でした。しかし、船員の人は皆、外国航路を何年も経験されているので、国際的の話題も豊富で、外国へ行った時のいろいろなエピソードを面白おかしく話

してくれ、たいへん楽しかった。

船の食事は昼食がメインで、持ち慣れぬナイフとフォークをぎこちなく使いながら、外国人はどれ程上手に使うのか、チラチラとオブザーバーの食事方法を観察するとソ連人もアメリカ人も皆、ライスを食べる時は右手にフォークを持ち替えていたし、生野菜は手でむしって食べていたし、やはり人間は食べ易い方法で食べるのである。左手にフォークを持ち、その背にライスをのせて食べるのは日本人が勝手に作った洋食マナーではないのだろうかと思った。

私の乗った母船には249名が乗っていたが食事内容は全て同じ、昔は差があり不平不満がたえなかったようです。しかし、人間は何かで差をつけたいらしく、従業員の食堂ではプラスチックの食器を用い、副食も大皿に数人分盛りつけてどんと置いてあるが、サロンでは蓋付きの瀬戸の食器を用い、副食も1人づつ盛りつけてある。

夕食時に酒がだされる日があったが、酔って海に落ちてはもともこもないので（私の場合、酔えばその傾向かなり大なので）船内では飲めない事にして乾杯をつき合う程度にしていたら、船内でNo.1の酒豪である局長さんに「あなたは絶対にノンペである。飲めるのに飲めぬふりをしている。飲む時、口をコップに近づけるのはのんべの証拠である」と事実を言いあてられ、ごまかすのに四苦八苦しした。ソ連人の酒の強さには驚かされた。彼らは黒パンにバターをたっぷり塗りと塗り、それを食べ、まず胃壁を脂で覆った後、強度のウォッカを水を飲むかのごとく、グイグイ飲む、さすがに極寒の地に住む人間の強さである。

北洋サケ・マス母船式漁業に於いて、実際サケを漁獲する船は、96tの小さな独航船である。1母船に43隻の独航船が配属され、そのうち6隻は先航船と呼ばれ、好漁場を探す調査船で、週に1度位しか母船にもどってきません。漁期も後半になった頃、予てからの念願がかなえられ、独航船に乗る機会を得た。母船では1度も船酔はしなかったが、独航船の揺れはピッチが速く、又運悪く低気圧がやってきて大時化となり、数時間も経たぬうちにダウン、投網と揚網の時だけは起きだして、じっくり見ようとしたが、数十分もしないうちに、ベットへ逆もどり、全く情けなかった。

独航船にはレーダー、無線機等は故障にそなえ2台づつおかれており、船の位置を知るのもN N N S方式で、定期的に人工衛星から送られてくる信号

をもとに、デジタル表示で1目で判る素晴らしい装置を備えている。天気図新聞も無線ファックスで毎日送られ、日本の家族と直接電話できる装置もついており、船内は狭いが、設備はかなり整っている。

投網作業は午後3時頃より、約2時間かけて行なわれる。船を走らせながら、どんどん網を船尾より流すため、注意しないと、足にからまり網といっしょに海に投げ込まれる事もあり、落ちたら5分とはもたない冷たい海での危険な作業である。今年の操業において、この作業で、2名の尊い命が奪われた。揚網は午前4時半頃より、約3時間半かけて行われ、網を巻きあげる速度に合わせながら手際よく網からサケをはずす作業は寒い海の上とはいえ、皆汗だくになっている。独航船には、わずか18名の乗組員しかおらず、命をはって厳しい北の海で働く事は実にたいへんな事だと実感した。

「ベニの朝がかり」と言われ、早朝の揚網時にまだ生きているサケの大半はベニであった。ベーリング海ではシロが多く漁獲されたが、その時の揚網時刻は早く行われ、魚種により、移動する時刻に差があるというのを初めて知った。

北洋での洋上生活は約2ヶ月間だけだったが、初めての経験もあり、最初の1ヶ月はすぐ経ってしまったが、残りの1ヶ月は長く感じられた。船長いわく「初めて洋上生活する人は3ヶ月が人間の限界である」彼はもう何年も南氷洋へ鯨を捕りに行っているが、その航海は6ヶ月に及び、3ヶ月毎に監督官が交代になるという。外国からも乗船するらしいが、途中ノイローゼになったり、ひどい時は自殺する人もいるという。ノイローゼの典型的な症状は、誰とも話さなくなり、独りポツンと海を見詰め、自分の逃場を海に求め最悪の場合は海に飛び込んでしまうという。ノイローゼの原因は、ほとんどが陸に残してきた愛人や新妻のことを想い航海中に受け取った一通の手紙の中の一言がすごく気になり、勝手に悪い方に想像し被害妄想に陥るらしい。実際例として、過去に従業員の一人がノイローゼにかかり、缶詰を洗浄する水留めの中に飛び込んで一命をとりとめたという。

北洋で星空を見たのはたったの一度、それも数時間だけだった。太陽が海から出て海に沈む情景は美しい。北上するにつれ、夜明けが早くなり、午後11時過ぎにはもう明るくなりかけ白夜らしきものを初めて体験し、自然は素晴らしいと感じ、この広い北洋の中を、サケが回遊し、秋には生まれた各々の河川へ遡るといふ不思議なサケの生態に、尚いっそうの興味をおぼえました。

「一つの影」

三 国 真 英

このたび北洋さけ・ます漁業の母船監督官として乗船の機会を得ましたので、2ヶ月半の短い体験でしたが、その時をふりかえりながら思い出などを書いてみます。

ご承知のとおり我が国の水産業をとりまく昨今の情勢は非常に厳しいものがあります。特に今年の北洋さけ・ます漁業についても、日ソ間の漁業協定、割当トン数が迂余曲折の結果決定したことから、出船に当たっても、私なりに一抹の不安がありました。しかし反面過去に北洋さけ・ます漁業に行かれたことのある諸先輩からの監督官としての心得、対人関係、その他諸々の体験等を聞き心強さもありました。

5月21日、今回監督官として行くことになりました奈良、高橋(敏)両氏と共に本場にて会い出発の挨拶並びに場としての事務打合せを行ない、翌日両氏と共に函館入りしました。両氏とは5月26日の出航日迄、本庁並びに遠洋水研よりこられた係官のレクチャーを受けるとき一緒でしたが、それ以後は帰場迄お会いすることはなく、洋上において電報の交信しかありませんでした。

5月26日の出航日は私達の壮途を祝うがごとく好い天候に恵ぐまれ、乗船した母船明洋丸(大洋漁業、函館公海漁業、宝幸水産の三

社共同)のエンジンも快調そのもの、長期船内生活の不安をふきとばすほどでした。しかし波止場の片隅で見えかくれしていた一つの影(のちの私のカ



写真1 ソ連オブザーバーと共に……



写真2 母船明洋丸にて(筆者)

一チャンスです)だけが、不安の材料でもありました。船内の生活は、規則正しく食事は朝8:00、昼12:00、夜17:00と正確に決められており、船の揺れはほとんどなく食事の質も独身の(今は違います)私には、レストランで毎日といった感じで、素晴らしいものでした。それに加えて娯楽も豊富(麻雀あり、映画あり、素晴らしい本があり)、又乗船している人が、すばらしく良い方ばかりでした。

仕事の内容は、8:00になりますと各漁場よりその日の水揚げを積みこみ独航船が帰って来て、それらの独航船を手際よく係官が船のオモテ(船首の方)とトモ(船尾の方)に着船させ、着いた独航船は、帰路魚種毎にわけておいたモッコ(魚を入れてある網袋)を母船より降ろされたウインチにひっかけ母船に揚げます。私達の仕事は、そのウインチについているハイドロスケール(計量器)で揚げられた魚種毎の秤量をするのが主な役目で、同じようなことを母船に附属している独航船43隻について毎日行ない1日の水揚げ終るのは15:00頃で、この時やっと水揚げした独航船はまた、各漁場へ散り洋上の賑わいも一段落します。しかし船内は水揚げされた魚の処理に追われますし、私達は(もう1人副監督官として三重食糧事務所の大瀬利夫氏が乗船していました。)その日の集計、監視船への報告等の業務を処理します。

今年の操業は、6月1日より7月24日迄行ない、この間米国200カイリ内では米国の、また公海内ではソ連の各オブザーバーが常時乗船して、検量チェック、生物調査等を実施し、遠洋漁業の厳しさをまざまざと見た思いです。操業中は、時化が多く(昨年より多いそうです。)2~3日水揚げ不能の時があり、また時化により減反したこともありました。操業中の独航船から作業員一人が投網作業中行方不明となる不幸もありました。この様な悲喜交々の洋上生活も7月24日割当トン数消化により終了し、母船は独航船43隻をひきつれて一路函館へと帰途につきました。

2ヶ月振りに見た緑のエリモ岬は言葉にいいつくせない感激で、また函館の赤い灯、青い灯も懐しく、長期病気もせず平穩無事に帰れたことを喜んでいきます。

検疫をすませ、上陸し監督官事務所での乗船報告、残務整理を済ませ、翌日帰場の途につきましたが、私にとって今回の長期出張は大変良い体験でした。この体験をこれからの仕事に生かしていきたいと考えております。